横田消防署：同志の結束

A band of brothers

June 1, 2020

By Airman 1st Class Brieana E. Bolfing
374th Airlift Wing Public Affairs

消防車がサイレンを鳴らして出動するとともに、夕暮れが訪れ、赤と青の回転灯が日暮れにコントラストを添える。現場に到着するなり、勇敢な隊員たちはあらゆる状況に立ち向かう準備を整え、迅速かつ的確に消火・救命活動を行う。

消火・救助を終えると、消防士たちは現場を片付け、撤退する。彼らが戻る場所は、寮や自宅ではなく、同僚と共に生活する消防署だ。第374施設中隊消防署にとって、チームは単なるグループではなく家族のような存在だ。

「我々の関係は、仕事の上だけではない。生活の半分を共にしているので、お互いをすぐに理解し合える。24時間のシフトでは、仲間が唯一の話し相手なので互いの私生活を知り尽くしている」とギャビン・メイソン空兵は述べた。

ほとんどの職場では、8時間もしくは12時間のシフト勤務だが、消防士たちは各24時間のシフトで同僚と共に働き生活をしている。睡眠、食事、勉強、運動の全ての時間を署内で仲間の消防士と共に過ごす。

これまでに共有してきた時を振り返り、メイソン空兵は、消防署での幾つかの面白い出来事について笑いながら頭を振った。

「ある日、数人がシャワーを浴びている最中に通報が入った。彼らは下着も履かずに飛び出て、体を乾かしながら装備を整えて到着に間に合わせた」とメイソン空兵は記憶を振り返った。

署内での出来事と仲間意識が、強い絆を構築している。

「火に立ち向かっている時でも、単に励ましやサポートが必要な時でも、ここでは誰もが信頼し合える。世話をしてくれる兄的存在も、親しげに冗談を言ってくる弟的存在もいる。このような兄弟のような関係があるのは最高だ。まさに家族のような存在であって、皆がすべてのメンバーを気にかけ、互いの成長を見守っている」と第374施設中隊クルー主任兼消防士のヘクター・ゲマレス・コロン軍曹は述べた。

そして「どんな場面でも、互いに真剣に向き合う」とコメントを加えた。

ほぼ毎日が訓練と楽しさに満たされる中、消防士たちは時に精神的に辛い任務を担わなくてはならないこともある。

「ある通報で向かった先には、助けを必要としている一人の幼児がいた。CPRを行ったものの、反応がなかった。そして病院に到着した時、亡くなったことを告げられた」とゲマレス・コロン軍曹はその時を振り返った。

また、「乗り越えがたいとても悲痛な局面だったが、仲間がいたからこそ、そのことについて率直に話し合えることができた。我々は互いに誠実に向き合うことで、それを乗り越え、前進できた」と述べた。

メイソン空兵によると、チームは互いの生活に深く関わり合い、常に互いに気を配り、家族としての絆を築くために行動していると言う。

「我々は決してすぐに相手をはねつけるようなことはしない。誰かが悪い日を過ごしていたら、話をして、大丈夫であることを確かめ

るまで寄り添う」とメイソン空兵は述べた。

そして、「我々は誕生日パーティーを開いたり、オンラインで一緒にビデオゲームをしたり、運動したり、出掛けたりして、ストレスの多い仕事の緊張を緩和させるようにしている」と加えた。

消防士たちは休日も変わらず、日本の街を歩いたり、オープンフィールドでスクラムを組んだり、一緒に過ごしていることが多い。

「フリスビーゲームから始まり、その後は100ヤードのスプリント、そしてまたその後何らかの形で柔術をするようになった」とメイソン空兵は言う。

消防署では、メイソン空兵の話で消防士たちから笑いが沸き起こり、仲間たちはそれぞれにエピソードを語り合った。

「どこにいても、他の消防士に出会うと無意識的に仲間意識を共有できることが、消防士の仕事とこのコミュニティの素晴らしさだ」とメイソン空兵は言う。

この消防の繋がりは、消防士たちの人生とキャリアに渡って強固な絆を築いている。